宗教とは何か

【2】宗教探索の旅

1）神道　お伊勢まいり

2016年2月27日（土）

【1】はじめに　　1月　1日（金）
【2】宗教探索の旅
　1）神道　お伊勢まいり　　2月27日（土）
　2）仏教　（身延）　　4月
　3）キリスト教　（東京）　　6月
　4）天理教　（天理）　　8月
　5）イスラム教　（　　）　　10月
【3】走れ　42．195km
　1）訓練状況　　5月
　2）結果　　11月
【4】お遍路さんの様に　徒歩巡礼の旅
　1）大月～笹子峠～塩山　　5月
　2）大月～富士吉田～河口湖　　8月
　3）大月～都留～秋山　　11月
【5】サムシング・グレート
　1）それって何　　3月
　2）宗教とサムシング・グレート　　9月
【6】まとめ　　12月

1. 宗教探索の旅　リマインド

【仮説】 本来、宗教は、人間が人間らしく、尊厳をもって、心豊かに、それぞれが協力し合って、生きることを教えるものである。
宗教が異なっても根本原理は同じである。

【検証】下記により、この仮説を検証する。

（1）旅の前に、これまでの自分の知識、文献、インターネットで、それぞれの宗教の事前調査を実施する。

（2） 総本山及び周辺を訪ね、自分自身の五感と頭と魂で感じ取る。

（3） 旅後、それぞれの宗教の特徴と他宗教との共通点と相違点を明確にする。

2. 今回の旅の目的

神道の神社本庁の本宗、伊勢神宮をたずね（お伊勢まいり）神道を探る。

3. 神道とは （インターネットから）

神道は、日本の宗教。山や川などの自然や自然現象、また神話に残る祖霊たる神、怨念を残して死んだ者などを敬い、それらに八百万の神を見いだす多神教。
自然と神とは一体的に認識され、神と人間とを取り結ぶ具体的作法が祭祀であり、その祭祀を行う場所が神社であり、聖域とされた。

神道の起源はとても古く、日本の風土や日本人の生活習慣に基づき、自然に生じた神観念である。このためキリスト教、仏教のような開祖が存在せず、縄文時代を起点に弥生時代から古墳時代にかけてその原型が形成されたと考えられている神道は古代日本に起源をたどることができるとされる宗教である。

宗教名の多くは何教と呼称するが、宗教名は神教ではなく「神道」である。伝統的な民俗信仰・自然信仰を基盤に、豪族層による中央や地方の政治体制と関連しながら徐々に成立した。また、日本国家の形成に影響を与えたとされている宗教である。

神道は奈良時代以降の長い間、仏教信仰と混淆し一つの宗教体系として再構成されてきた（神仏習合）。一方で伊勢神宮のように早くから神仏分離して神事のみを行ってきた神社もある。明治時代には天皇を中心とした国民統合をはかるため、全ての神社で神仏分離が行われた。
神道と仏教の違いについては、神道は地縁・血縁などで結ばれた共同体（部族や村など）を守ることを目的に信仰されてきたのに対し、仏教はおもに個人の安心立

命や魂の救済、国家鎮護を求める目的で信仰されてきたという点で大きく相違する。

神道は日本国内で約 85,000 の神社が登録され約 1 億 600 万人の支持者がいると『宗教年鑑』(文化庁)には記載があるが、支持者は神社側の自己申告に基づく数字であり、地域住民をすべて氏子とみなす例、初詣の参拝者も信徒数に含める例、御守りや御札等の呪具の売上数や頒布数から算出した想定信徒数を計算に入れる例があるためである。このため、日本人の 7 割程度が無信仰を自称するという多くの調査結果とは矛盾する。

4. 行動内容

1)日時

26日　21時12分:大月駅出発　中央本線
　　22時09分:立川駅着
　　22時45分:立川駅発　三重交通高速夜行バス

27日　7時10分:伊勢市駅着
　　7時30分～18時00分:お伊勢まいり徒歩旅　約15km
　　伊勢市駅→伊勢神宮外宮→月夜見宮→蔵の街河崎→皇學館大學→
　　神宮徴古館→神宮美術館→倭姫宮→月夜見宮→お伊勢参り資料館→
　　おはらい町→おかげ横丁→伊勢神宮内宮
　　19時00分:伊勢市駅着　市内バス
　　20時30分:伊勢市駅発　三重交通高速夜行バス

28日　5時10分:立川駅着
　　5時24分:立川駅発　中央本線
　　6時19分:大月駅着

2）移動内容

月夜見宮
蔵の街河崎
伊勢市
伊勢学園高
倉田山公園野球場
三重県立宇治山田高
宇治山田
神宮徴古館
神宮美術館
倭姫宮
皇學館(学校法人)皇學館高
伊勢神宮外宮
市立伊勢総合病院
世義寺
近鉄鳥羽線
伊勢
生鮮市場ベリー 藤里店
ぎゅーとらラブリー藤里店
麻吉旅館
伊勢やすらぎ公園
伊勢御木本通郵便局
五十鈴川
立宮山小
五十鈴中
月読宮
伊勢西
伊勢自動車道
伊勢市立進修小
伊勢市
お伊勢まいり資料館
猿田彦神社
おはらい町
おかげ横丁
五十鈴公園
鼓ケ岳
五十鈴川
伊勢神宮
伊勢神宮内宮
Google

5. 今回の結論

1）折乃笠の考え

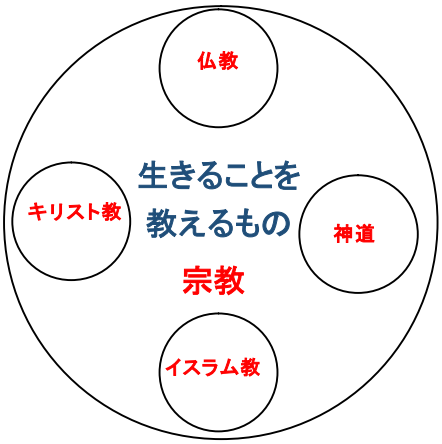
・今まで考えていた仮説は違うのではないか。

【仮説＃1】 本来、宗教は、人間が人間らしく、尊厳をもって、心豊かに、
それぞれが協力し合って、生きることを教えるものである。
宗教が異なっても根本原理は同じである。

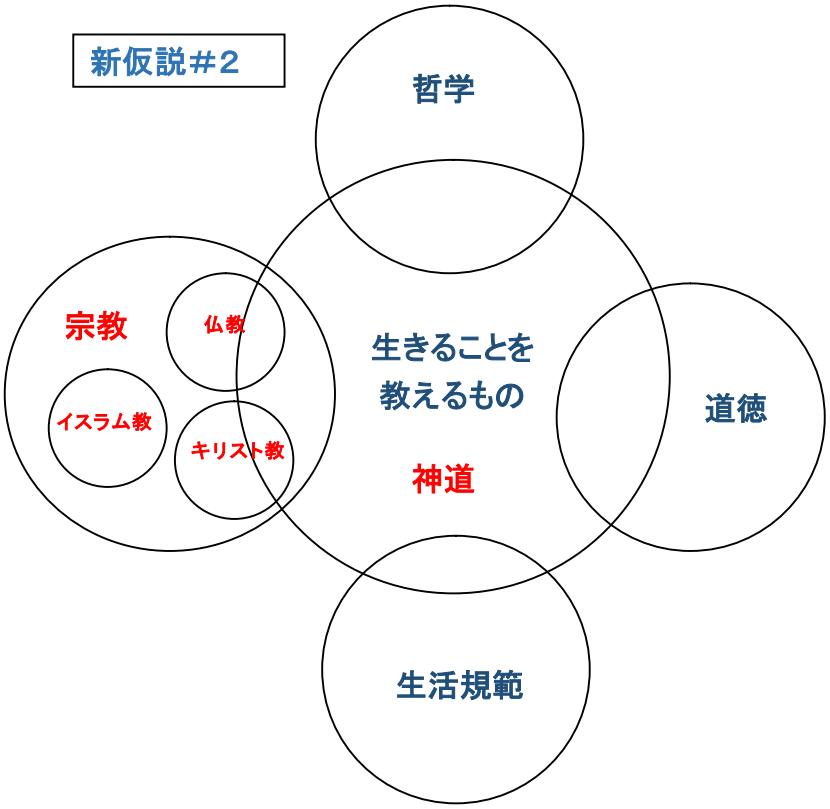
【新仮説＃2】 今回、お伊勢まいりの結果

① 神道は宗教ではなく、哲学・道徳・生活規範・宗教の複合体
② 神道は“生きることを教える”だけのもの
③ お伊勢参りの目的は神道だけでなく、観光もある。
④ 仏教、キリスト教は純粋な宗教で“生きることを教えるもの”だけのものではない。
⑤ イスラム教は純粋な宗教であるが“生きることを教えるもの”ではない

今まで考えていた仮説＃1



新仮説＃2



2）今後の進め方

他宗教調査を含め、更に調査、検討、考察を進めていく。

6. お伊勢まいり　徒歩の旅レポート
7時10分
三重交通日野セレガは快調に伊勢市駅に到着。
3列超リクライニングシートと適度のアルコールにより
睡眠まあまあ。昨日、立川駅を22時45分出発。
駅はすでに伊勢神宮モード。神々しい。
伊勢の街は神宮の街。空気がピリッとしている。

すでに神宮モードの伊勢市駅

7時15分
快晴の中、お伊勢まいりを
開始しまする。
掟に則り、外宮から内宮
の順番で参拝する。
外宮参道を行く。
時代を感じる老舗とモダンな
お店が共存している。
まだ、朝が早く、人はほと
んどいない。

駅から外宮参道を望む

大正創業の山田屋旅館

ここで、伊勢神宮を紹介
『神道は平安時代以前より出雲において日本神話とのかかわりが議論されていたらしく、『出雲風土記』には他所風土記とは違い、そういった性格を色濃くみることができる。鎌倉時代には伊勢神宮の神官による学問的研究がはじまり、徐々に現在の神祇信仰の形を取るに至った。そして、そうした伊勢派の努力はやっと江戸末期のお伊勢参りの確立によって知識人よりも祖霊性の強い庶民の一部からも支持を得ることに成功した。

伊勢神宮は、三重県伊勢市にある神社。なお「伊勢神宮」とは通称であり、正式名称は地名の付かない「神宮」。他の神宮と区別するため「伊勢の神宮」と呼ぶこともあり、親しみを込めて「お伊勢さん」「大神宮さん」とも称される。神社本庁の本宗である。
二千年という悠久の歴史を有る。

二十二社（上七社）の一社。また、神階が授与されたことのない神社の一社。古代においては宇佐神宮、中世においては石清水八幡宮と共に二所宗廟の１つとされた。明治時代から戦前までの近代社格制度においては、すべての神社の上に位置する神社として社格の対象外とされた。

内宮のご祭神は天照大御神（あまてらすおおみかみ）。日本人の総氏神といわれる存在。

外宮のご祭神は豊受大御神（とようけのおおみかみ）。天照大御神の食事をつかさどり、産業や食事に関する神様。

この内宮・外宮を中心に、それぞれの別宮、摂社、末社、所管社と呼ばれる宮社があり、すべて合わせて 125 社の総称が、伊勢神宮と呼ばれている。』

7時22分
伊勢神宮外宮に到着。
何か神々しい壮大な雰囲気。
既に、大御神に圧倒されている感じ。
まだ、朝早く人はあまりいない。

表参道火除橋を渡る。

表参道火除橋を渡り外宮の中へ

外宮地図

御正宮。
4重の垣に囲まれた御正宮には
豊受大神を祀る御正殿と東宝殿と
正宝殿などが建つ。
中には入れない。

御正宮

総ひのき造り。
何だろう、この雰囲気は。
神様がいるようだ。
気が引き締まる。

現代版　お伊勢まいり

現代のお伊勢まいりの集団が御正宮へ向かう。
旗には、各県名が書いてある。
「せめて一生に一度はお伊勢さん」
総勢800名以上はいる。圧巻である。

ここでお伊勢まいりを紹介
『「お伊勢まいり」が盛んになったのは、五街道が整備された江戸時代。
自由に旅行ができない時代に、お伊勢参りは特別に許可されていたようです。
年間500万人も参拝した年もあるほどの熱狂的な「おかけ参り」が起きたのが
江戸時代後半。
「一生に一度はお伊勢参り」と、多くの日本人が初めての「旅」を体験しました。』

お伊勢まいりについて、更に知るために
”お伊勢まいり　平岩弓枝著“を読んだ。
お伊勢まいりは、宗教と言うよりも観光である。

更に外宮の中を廻る。別宮がある。
別宮は、内宮・外宮の御正宮のわけみやという意味。
御正宮についで尊ばれ、全部で14宮ある。

別宮　風宮　蒙古襲来時神風を吹かせたという

別宮　土宮　外宮の宮城を守る神様を祀る

別宮　多賀宮　高い所に祀られているので高宮と呼ばれる

8時17分
外宮から歩いて10分。
別宮　月夜見宮。
『月夜見尊と、その荒ぶる神霊である月夜見尊荒御魂の2柱の神を同じ社殿に祀る[1]』
ここでも静寂。
自然の木が祀られている。

別宮　月夜見宮

出典：インターネット

せんぐう館

9時00分
再び外宮に戻り、神宮の資料館：せんぐう館で勉強する。
ここで、神道及び伊勢神宮の多くの事を学び、驚愕、喜び、凄さを知った。

◆瑞穂の国　『我が国は古より瑞々しく美しい稲穂が実り栄える国として、「豊葦原の瑞穂国」と称えられています。稲は命の糧であるとともに、日々の営み、政治・文化の礎をなすものです。そしてその始まりは神々の時代、天照大神が皇孫に下された神勅までさかのぼるものです。』

◆世界が見た日本、神道、伊勢神宮
『①フランスのエリート
「十数年前フランスの若いエリート達が伊勢神宮を見て自国の聖地は伊勢神宮程の精神性は無いと言った。他の学者も伊勢の荘厳、森厳の静寂に宗教の根源的なものを感じた。」

②アーノルド・トインビー
トインビーは神道を高く評価し、「日本の活路」で言った。「戦後、日本人は近代化の道を邁進してきたが、その見返りとして心理的ストレスと絶えざる緊張にさらされている。それは産業革命がもたらすまぬがれない代価である。ところが神道は、人間とそのほかの自然との調和のとれた協調関係を説いている。日本国民は、自然の汚染によってすでに報いを受け始めているが、実は神道の中にそうした災いに対する祖先伝来の救済策を持っているのである。」。物質文明が避けられない災いを救う宗教であると言っている。

③アルベルト・アインシュタイン博士

1933 年来日した時の発言、「世界を驚かせた近代日本の発展は、一系の天皇を頂いていることにある」と分析し「戦いに疲れた世界が求める未来の盟主は、武力や金力ではなく、あらゆる国の歴史を抜き越えた最も古くて尊い家柄である天皇家を頂くアジアの高峰、日本である。我々は神に感謝する。我々に日本という尊い国をつくっておいてくれたことを」と絶賛した。』

◆未来へ

『進化の一方で伝説を守る、そのような国がこれからの国際社会で信頼を保てるのではないだろうか。』

折乃笠がせんぐう館で感じたこと

静寂と規律と木の温もり。
神道とは日本そのもの。
日本の根底には神道がある。
春夏秋冬、日本ならではの四季。
神道は四季を織りなす。

参道通り

10時00分

外宮を後にし伊勢市駅まで参道通りを行く。雰囲気は完全に神宮と言う感じ。

河崎の街並

10時25分

蔵の街、河崎を歩く。
河崎は伊勢湾を渡ってきた伊勢神宮の参拝客が上陸する河岸を中心に室町時代から江戸時代にかけて発達した町で、町屋や土蔵などの歴史的景観が残されている。
昔へタイムスリップした様だ。
古い建屋を利用して、レストラン、喫茶店、土産屋がある。

10時55分

しばらく伊勢の街並を歩いていくと皇學館大学着。
神道学科が中心で神宮に相応しい大学だと思う。
構内に入り神道博物館を見学させてもらった。
神道がたいへんわかりやすく説明されていて立派である。

皇學館大学　入口案内板

皇學館大學を紹介。
『1882 年（明治 15 年）に伊勢神宮祭主であった久邇宮朝彦親王の令旨によって林崎文庫に設置された神宮皇學館を母体とする。主として神職や教員の養成にあたり、1903 年（明治 36 年）に官立の旧制専門学校（内務省所管の宗教系旧制専門学校）を経て、1940 年（昭和 15 年）には旧制の官立大学（文部省所管）になるが、第二次世界大戦終結後は国家神道を推進した機関の一つとして、いわゆる神道指令を受けて廃学・解散した。現在の大学は 1962 年（昭和 37 年）に私立大学として、旧制神宮皇學館の関係者が中心となって「再興」したものである。』
小生第二の人生は、皇學館大學大学院で神に道を勉強するも良いと真剣に考えた。

１１時３０分
神宮徴古館、神宮美術館にて神道を勉強し、別宮倭姫宮、月読宮にて神道を経験した。

ルネッサンス様式の神宮徴古館全景

神宮徴古館展示の遷宮儀式

日本最高峰美術工芸品がある神宮美術館

神秘的な倭姫宮

４宮が並ぶ月読宮

お伊勢まいり資料館　全景

１４時００分
さて、内宮に入る前に面白い資料館があった。
お伊勢まいり資料館。
江戸時代のお伊勢まいりについて、当時の風情を和紙人形で再現し、パノラマで展示している。
お伊勢道中の壮大パノラマ。
１５００体の紙で作られたお人形さん達がドラマをつくっている。
江戸時代お伊勢まいりは、明らかに観光旅行である。

お伊勢まいり資料館　大パノラマ

１４時２０分
内宮参道のおはらい町に入る。

宇治橋から五十鈴川に沿って続くおよそ 800mの美しい石畳の通りには、お伊勢さん特有の切妻・入母屋・妻入り様式の町並みが軒を連ねる。
通りにはたくさんの土産物店・飲食店や商家が建ち並んでいる。
参拝客でごった返している。

おはらい町　赤福もちの本店がある

おはらい町から左旋回しておかげ横丁に。
ここで神恩太鼓演奏があった。
大中小の和太鼓の演奏。
魂に響いてくる。
まさしく、神の響きであった。

3人の太鼓手による神恩太鼓演奏

15時05分
内宮入口の宇治橋たもとに到着。
いよいよ内宮を参拝する。
とにかく人が多い。

宇治橋大鳥居

内宮地図

天照大御神を祀り、2000年以上の歴史を持つ伊勢神宮
内宮は日本最大級の聖地である。
宇治橋は一年に700万人以上の人が渡る橋だそうだ。
内宮内を流れる五十鈴川を渡る。

宇治橋から五十鈴川を望む

宇治川を渡ると広々とした神苑が広がる。

石段を降りると五十鈴川の御手洗場。
とにかく水が清い。心まで清められる。

清い五十鈴川の御手洗場

さらに行くと神杉が立ち並ぶ
参道がある。

神杉が並ぶ参道

内宮の御正宮

御正宮
五重の垣に囲まれた御正宮。向かって左手に式年遷宮のための新御敷地がある。
どこも神々しい。

風日折宮橋を渡って別宮風日折宮へ行く。
木々の緑と清らかな川と木造の橋が日本的な風景と精神を表わしている。

風日折宮橋の風景

鯉が泳いでいる。
どの鯉もはっきりした色をしており美しく荘厳。
まったく人を恐れない。

伊勢神宮　内宮。
木、水、鯉、道、全てが神々しい。

美しく荘厳な鯉

16時05分
伊勢神宮　外宮　内宮　別宮、そして各博物館等全ての調査が計画通り終了した。
神苑のベンチに座り、歩く人々とその後ろの景色を観ている。
夕方近くになってきたが、外はとてもあたたかい。
遥か先の山の中に日の丸の旗がなびいている。
その下には梅が咲いている。
その中を参拝に来た方々が規則正しく歩いている。
全ての人の顔は清々しく輝いている。
笑顔がとても良い。
お伊勢まいりの効力かもしれない。
ベンチに座って30分、
こちらも心の中の雲が晴れていく様だ。
お伊勢まいりの不思議な力を感じる。

山の中の日の丸

清々しく輝いた顔の参拝に来た方々

内宮に向かって最敬礼している若いカップル

宇治橋を渡り、大鳥居での光景。
参拝者のほとんどの方が内宮に向かって一礼をしている。
何気ない光景に見えるが、これがまさしく日本人の神道の感謝の心ではないだろうか。
若いカップルが最敬礼している。
日本はまだまだ大丈夫。
感動で涙ぐみながら自分も最敬礼していた。

１８時００分
伊勢うどんのお土産を買って、バスで伊勢市駅へ。

２０時４５分
三重交通日野セレガは立川を目指し発車。
伊勢の酒“白鷹”を飲みながら今日のお伊勢まいりを想う。
二杯目を飲み終わるといつの間にやらウトウト。

翌５時１０分
立川駅着。
お伊勢まいり　夢のまた夢。

6. グルメ情報

1）お昼ご飯の部　13時10分

月夜見宮前のつきよみ食堂に入る。
伊勢名物の伊勢うどん特盛をたのむ。￥700。
ん～？　これで大盛の上の特盛？
食べてみる。美味い～。うどんのモチモチ感が最高。
ところでこれ何の味？ジャコ（雑魚）だそうだ。
食べてみると結構、ボリューム有。
食べ終わってみると充実感たっぷり。

伊勢名物の伊勢うどん（特盛）

2）おやつの部　14時55分

おかげ横丁の豚捨揚げたて
のミンチカツとコロッケを食べる。
揚げたてサクサクで最高～。

Before

After

豚捨のミンチカツとコロッケ

3）夕食の部　16時45分

おはらい町のすし久、だいぶ早いが夕飯を食べる。
伊勢で有名なてこね寿しをたのむ。
＊伊勢志摩の漁師が釣った魚を船上、手でこねて
　食べたのが始まり。
　秘伝の醤油に漬け込んだカツオがさっぱりしている。
　定食で￥1190はリーズナブル。
先ずは生ビールで乾杯。旨～い。
てこね寿し、ごはんに味が浸みていて最高。
醤油付けのカツオも最高。
赤だしの海藻の味噌汁も最高。
超充実感で御馳走様でした。

てこね寿し、赤だし味噌汁、つけ出し、生ビール

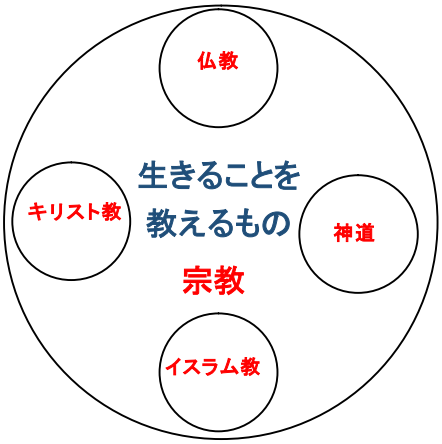
上記全てお伊勢まいりに含まれる。

7. まとめ

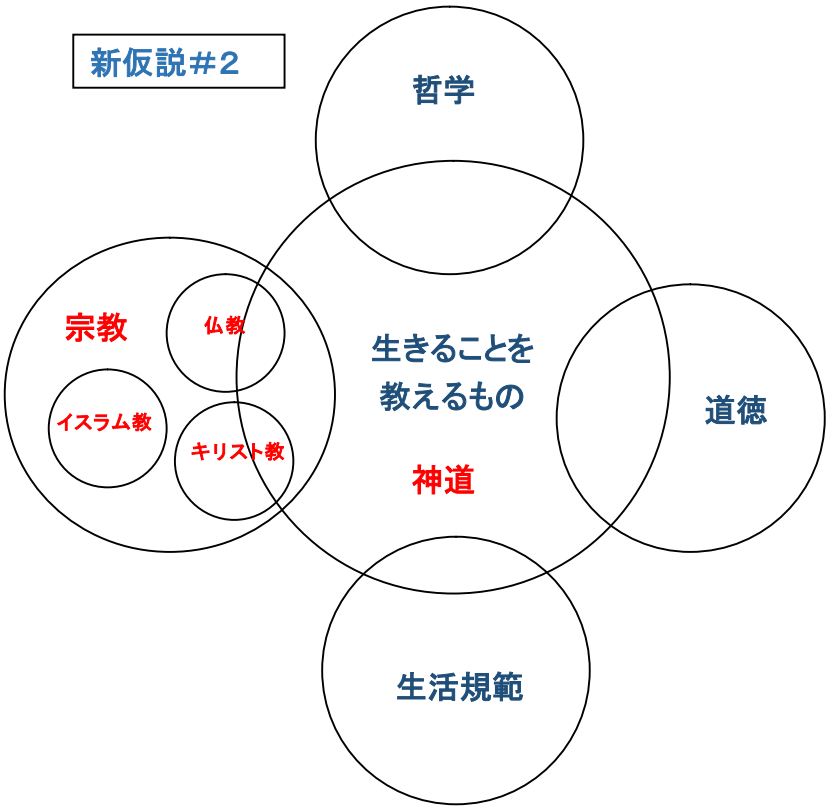
1）折乃笠の考え

【新仮説＃2】 今回、お伊勢まいりの結果

今まで考えていた仮説＃1



新仮説＃2



① 神道は宗教ではなく、哲学・道徳・生活規範・宗教の複合体

【根拠】

a. 神道は、自然と調和し祖先を含めた人同士が繋がりあい生きていくという我が国の道徳、倫理、秩序、生活規範を示している。

b. 宗教とは、読んで字の如く「教えるのを宗とする」もの。
従って宗教には必ず教える人と教えられる人と材料がある。
・教祖がいない。（自然発生的に成立した神道には、教祖がいない）
・教典がない。（神道では祭祀、儀礼を重視）
・布教活動をしない。

② 神道は“生きることを教える”だけのもの

【根拠】

a. 他宗教は、宗教戦争等の闘争に明け暮れて疲れ果てている。

b. 他宗教は、布教のためにはあらゆる手段を使うことがある。

③ お伊勢まいりの目的は神道だけでなく、観光もある。
【根拠】
a. 江戸時代には日本の全人口の5分の一が訪れた。
b. 伊勢神宮の周りには、ありとあらゆる娯楽施設があった。

④ 仏教、キリスト教は純粋な宗教で“生きることを教えるもの”だけのものではない。
【根拠】
a. イメージ

⑤ イスラム教は純粋な宗教であるが“生きることを教えるもの”ではない
【根拠】
a. イメージ

2）今後の進め方
他宗教調査を含め、更に調査、検討、考察を進めていく。
まだまだ、調査が足らない。

3）最後に
私は鳥居の下で内宮に向かって若いカップルが最敬礼している姿にたいへん
感動致しました。
最敬礼をする若いカップル、それを見て感動する人、これはまさしく大自然に対する
謙虚な感謝の気持ちから来る普通の行為だと思います。
意識して行動しているのではありません。

今回のお伊勢まいりは、改めて日本、日本人、日本文化の素晴らしさを神道という
観点で知ることが出来ました。
たいへん有意義な価値ある経験でありました。

参考文献 （インターネットより）

日本文化における神道の役割（過去・現在・未来）

※この文章は2009年10月22日～25日に大韓民国・高麗大学校にて行なわれた第一次仙＆道国際学術大会での梅田善美前理事長の基調講話によるものです。

神道とは何か？

最初に神道を簡単に紹介します。神道とは日本の土着の宗教です。日本の古代から現代に続く民族宗教であり、日本人の生活文化の全般に浸透し、しかも外来文化を受け入れて、日本的に変容させるというエネルギーをもっています。その原点は古来の民間信仰と儀礼の複合体で、動物や植物その他生命のないもの、例えば岩や滝にまでも神や神聖なものの存在を認めるいわゆるアニミズム（精霊信仰）的な宗教です。その起源は遠い昔に遡ります。西暦紀元前200年頃までといわれる縄文時代の遺跡から発見された遺物の多くには何らかの呪術的な意味を持っていたとおもわれるものがあります。

古代の日本では、各地方で様々な慣習が行われていましたが、それらが一つの宗教的体系をなしていたとは言えません。各地に儀式や禁忌、タブーをつかさどる専門家や占い師や語り部の集団がありましたが、それらは、繁殖を促す儀礼と祓い清める儀礼が中心でありました。地方ごとにおこなわれた季節の祭りや先祖崇拝、超自然的な力への畏敬、それらが日本の島々の創造とそこに住む神々の降臨の伝説がつながっていました。

神道はこのように、人々の日常生活と密接な関係を持つ日本の信仰形態で、過去においてもそうであり、現代にもそれが続いています。神道は、それを作り出した教祖もなく、キリスト教における聖書やイスラム教のコーランにあたる教典もなく、組織化あるいは体系化された教団もありません。そのため、神道は宗教ではないとさえ言われています。神社には氏子とよばれる崇敬者たちがいますが、これは、いわゆる「信者」あるいは「教会員」とは異なっています。神道には神学や会衆による礼拝はあまりありません。崇拝される対象となる統一的概念は「カミ」もしくは「カミガミ」と言う言葉で言い表されていますが、近代になって、それが英語で「God ゴッド」と訳されたものですから、今もしばしば、いわゆる一神教の神と混同され、誤解を生じています。

古代からの信仰は、西暦538年に日本に伝来した仏教という新しく輸入された宗教との競争に直面して、はじめて神道と名づけられました。すなわち「神道」という言葉は、日本の伝統的な信仰形態を仏教と区別するために、中国の道教につながる言葉をもちいたのであり、「神（かみ）の道」という意味を表わします。

この「神道」という用語が最初に文献に出て来るのは、西暦720年に編纂された『日本書紀』という歴史書ですが、そこでは宗教的儀式や神々または社（やしろ）を指したもので、現在使われているような宗教の教義のまとまった体系の意味で使われるよう

になったのは12世紀からです。
古代の日本には、ほとんどが韓半島を経由して、中国からの膨大な文物が流入しています。その中に道教にかんするものが含まれていたとしてもなんら不思議ではありません。
日本の神社仏閣にはいろいろな道教的要素が見られますが、中国に見られる道観という形式の組織は形成されませんでした。ここで、日本では道教がどのように位置づけられているかについて、日本における道教研究の第一人者として知られている窪徳忠（くぼのりただ）先生の定義をご紹介いたします。すなわち道教とは、「古代の神仙説および古代の民間の雑多な信仰を中心とし、それに道家の哲理、易、陰陽、五行、および讖緯（しんい＝未来の予言）や医学、占星などの説や、巫祝（ふしゅく＝巫女・シャーマン）の信仰などを加え、仏教の体裁や組織にならって、宗教的な形にまとめられたもので、不老長生を主な目的とする、現世利益的な宗教」という長いものです。
こうした道教的要素が中世の神道や仏教と交わって、修験道や風水占い、あるいは陰陽道などという日本で独特の信仰体系を成立させていきました。
数世紀にわたって神道と他の信仰形態は様々に展開しました。とくに仏教との関係はある時は「両部神道」として、神仏が合体して信仰の対象となり、日本全国に神社と寺院が共存していたわけです。近世になると『古事記』や『日本書紀』に記載されている神話が、歴史につながっているものだという「復古神道」がとなえられ、そこから天皇を天照大神の子孫として崇める人々がでてきました。
国家神道の発生と海外神社の設立
19 世紀になると、神道の歴史に大きな転換期が訪れました。それは、200年以上にわたる鎖国による封建主義が終わりをむかえようとした1860年代から、日本が新しい国づくりを目指す文明開化という時代に入ったからです。ヨーロッパやアメリカで、自分たちとは違う文明や価値観を見聞した日本の為政者たちは、日本にも精神的な規範が必要だと考え、神道が日本の伝統的な信仰であり、日本人の日常生活に深く浸透しているものであることに着目しました。そこでまず神社と寺院とを分離し、さらに神社を整理統合し、国家の支配下に置くことにしました。いわゆる「国家神道」の発生です。
ここで注釈を加えますと、国家神道という定義は、もとから存在したものではありません。この言葉は、1945年に日本が第二次世界大戦に敗北して、米国の太平洋陸軍総司令官ダグラス・マッカーサー元帥率いる連合国軍最高司令官総司令部（GHQ）が日本を支配しはじめたときに、さまざまな占領政策を打ち出し執行した中で、「神道指令」を発して、神社を国家の関与から切り離すことを命じた中で、神道を State Shinto と名づけたものです。もともとは、神道の皇祖崇拝の伝統を基礎にしたものが国の公の祭祀となり、1868年の明治維新と呼ばれる王政復古に対して、神代へ回帰する

という表面的なイメージを与えることになりました。こうして神道は、すべての日本国民に対し、宗教としてではなく、愛国的義務的儀礼として定義されることになりました。いっぽうでは、この時期に、いくつかの民衆宗教運動から派生した天理教、金光教、黒住教などが広く全国的に普及し、布教活動が許されるようになりました。その一つである大本（おおもと）は世直しを訴えて日本ばかりか海外にも知られるようになりましたが、そのユニークな活動は国家に対立するものであり、天皇への反逆的な活動であるとして、当時の日本政府から大弾圧を受けました。
明治時代の日本は「富国強兵」というスローガンのもと、海外進出をはじめました。北米や南米やハワイなどへの移民が始まり、多くの日本人が中国大陸や韓半島や東南アジアの国々に住み始めました。それにともなって、各地に大小さまざまな神社が建設されました。それらは「海外神社」と呼ばれ、約600箇所にも及んでいたと言われています。最盛期は1915年頃から1945年までで、「日本民族のあるところ、必ず神社あり」と表現されたほどでした。多くは移住した日本人たちの心のよりどころとして建設されたのですが、中には日本政府の植民地支配と日本の国家観念を植え付けるための「統治の手段」として特別に作られた神社もありました。「朝鮮神宮」や「扶余神宮」がそれにあたります。
1945年にいたって、第二次世界大戦で日本は敗れ、占領軍の民主化政策により、「国家神道」は解体され、新しい宗教法人法のもと、神道は「神社神道」と「教派神道」に大きく二分されるようになりました。現在、日本全国には約10万の神社があり、そのうちの8万社あまりは「神社本庁」に属しています。また、多くの教派神道組織がその活動を復活し、それ以外にも神道や仏教の基本的な教えや実践に基づいて全国各地で数百の新宗教が現われました。　　私は日本人の一人として、国の政策によって作り出された国家神道が、わずか80年足らずの存在だったとはいえ、近隣諸国で神道の名の下に、神道本来には無い活動をしたことを恥ずかしくおもいます。

日本人の日常生活における宗教の役割

　ここで、日本人の宗教に対する考え方や接し方をとりあげてみましょう。日本人に「あなたの宗教は何ですか？」と質問してみると、すぐには答えがかえってこないのです。そのために「日本人は無宗教だ」といわれるのですが、それは、日本ではあらゆる宗教が共存しているからなのです。さきほどお話ししたように、神道は古代から現代につづいている日本の民族信仰ですが、その間に、西暦3世紀から4世紀頃には儒教や道教が伝来して日本人の生活になじみはじめました。つづいて6世紀には仏教が伝わって来て、それらと日本固有の伝統信仰と区別するために神道（シントウ）という言葉が生まれました。16世紀にはキリスト教が日本に上陸しました。
キリスト教の宣教師たちは、日本人が神社にもお寺にもおまいりするのを見て、驚きました。ある宣教師は祖国に、次のようなレポートを書き送っています。「日本には宗

教が二つある。神道と仏教というもので、長い年月を経て、お互いに影響しあって、日本人の生活に溶け込んでいる。日本人はホトケという偶像を拝み、カミという見えない存在に畏敬の念を抱いている。仏教のお寺にも行き、神道の社にも行くことに何の不思議も感じない。」一神教であるキリスト教徒にすれば、カミもホトケも同一に感じ、礼拝しているのは、理解できないことだったのです。
このような日本独特の宗教共存を可能にしたのは、八百万の神々を崇拝する神道が基盤になったからです。神道には、もともと包容性があり、客人（まれびと）を大切にして、異文化との接触による文化変容を可能にする素地がありました。これを人間の身体にたとえてみると、日本人は自分たちの作った食物のほかに、外国から入ってくる食材をもとにして新しい食物を食べ、それらを消化して、栄養源にしている、と言うことです。
日本では「文化庁」という役所が宗教団体を取り扱っていて、毎年、「宗教年鑑」という日本の宗教に関する統計を発表しています。それによりますと、文化庁に登録されている宗教法人の総数は１８２，９８５法人で、内訳は、神道系が８４，９９６法人と全体の４６．４％を占めており、仏教系が４２．９％、諸教が８．４％、そしてキリスト教系が２．３％となっています。さらに、それらの法人に属している信者・会員の総数は、２１３，８２６，７００人で、神道系がそのうちの５０．３％、仏教系が４４．０％、諸教が４．７％、そしてキリスト教系が１．０％となっています。ここで、みなさん、気が付いたことと思いますが、日本の最近の人口は１億２千万人強ですが、文化庁に登録された宗教団体に属する信者総数は２億１千３百万人強となっていることです。つまり宗教人口が実際の日本人口の２倍近くになっているのです。どうしてこんな現象が起きているのでしょうか。そのわけは、一人の日本人が複数の宗教団体に登録されているからなのです。神社の氏子であり、お寺の檀家であり、新宗教の会員でもあるということが何の不思議もなく行われているのです。さすがにキリスト教系の団体では、そんなダブルブッキングは許されていないようですが、神社やお寺は二重、三重に所属していてもとやかく言うことはありません。ですから、最初の「あなたの宗教は何ですか？」という質問にすぐに「私の宗教はこれです」と答えがでないのは、そのような事情があるからなのです。韓国や中国の場合はいかがですか。
いずれにせよ、この宗教年鑑の統計にあらわれているように、神道系の宗教が日本人の宗教生活に最も大きな影響を与えていることがお分かりになるでしょう。

世界の平和文化への神道の貢献

　今日のお話しの最後に、神道の現代における存在意義を考え、未来への展望をしてみたいと思います。
神道国際学会がアメリカ合衆国のニューヨークで１９９７年に開催した「神道と環境」をテーマにしたワークショップに、アメリカの有名な環境問題専門家で『地球の夢』、『宇

宙物語』の著者であるトーマス・ベリー博士が次のようなメッセージを寄せられました。
『神道から教えられる普遍的なものは、聖なる世界へ通ずる道は我々が住む世界にこそ見いだされる、という考えだ。神道の一番の特長は、ありのままの姿の自然とその永遠なる価値が直接結びついたシンプルさにある。日本の文化は今、世界中から注目を浴びている。神道の伝統から来るインスピレーションのもとで、この自然の力との交わりを新たにすることによって、 人類が今まさに求めている自然からの活力を受け、導かれ、大いに癒されることができるかもしれない。』
"The universal lesson of Shinto is that the way to the world of sacred is through the place of our dwelling. The primary virtue of Shinto is its utter simplicity, its immediacy with the natural world in its primordial reality and its enduring value. The Japanese heritage now finds a resonance throughout the Earth. Through a renewed communion with these powers under the inspiration of the Shinto tradition the larger human community might attain that increase in the energy, the guidance and the healing that are among its present needs." (From a special message to ISF's workshop on "Shinto and the Environment" from Dr. Thomas Berry, eminent environmentalist and author of influential ecological writings such as The Dream of the Earth and The Universe Story.)
神道は、「多神教」と定義することができます。先に述べたように、カミを「ゴッド」と訳すのは、一神教における創造神に伴う考え方と混同しやすいため誤解を招きます。私たちは、kami とそのまま使うことをすすめています。説明的には deity(deities)と訳します。
神道は汎神論ではありません。なぜなら、この世のすべてのものが霊性を持っていることは認めますが、すべてが神として崇められるのではないからです。神として崇める対象に選ばれるのは、人間を超えた知恵や力などの霊的特性を示すものに限られます。神道は、絶対的な神あるいは全知全能の神を認めず、それぞれの霊的特性を持つ八百万の神々に対して崇敬を寄せるのです。
「ネイチャー」という言葉は二つの意味を持つと言えます。一つは、「自然界」の自然であり，もう一つは、「あらゆる物の本質」と表現できます。環境問題の文脈で使われる「ネイチャー」が前者、つまり自然という意味で使われるのはいうまでもありません。しかしこの概念は１９世紀の半ば頃日本人がはじめて接した西洋の思想から来たもので、日本ではまだ新しい概念であるということを忘れてはなりません。それまでは、後者，つまりものの本質という意味しかなかったのです。日本人が自然界について語るときは「天地」とか「万有」あるいは「山川草木」というような表現を使っていました。
遠い祖先の時代から受け継がれて来た日本の伝統的な信仰である神道が求めるものは、自然とともに生き、祖先の心を己の心とし、人と平和に暮らすことであります。自然と調和して生きることによって安心を見いだし、祖先の時代から受け継がれて来

た伝統を尊重することによって精神的な支えを得て、人と人とをつなぐ絆を大切にして、より良い生き方を見いだすことができるのだと、日本人は昔から信じて来ました。
近代における科学の進歩の結果、世界は大きく発展を遂げ、その進展は世界中で止まることなく続いています。しかしこの発展は同時に地球の自然環境の破壊を意味し、その危機はますます深まりつつあるのです。この地球的危機に急いで対処しなければならないのですが、まず自然と人間との関係を見直し、昔から積み上げて来た人類の知恵を活用して破滅への行進をどのようにして止めるかを考えなくてはなりません。
本来、日本人の自然観は、畏敬の念をもって神々の世界としての山や森、 川や海に接することでありました。こうした態度はおそらく日本の土地が青々としていて海に囲まれ、比較的温和な気候とはっきりした四季に恵まれているせいでもあるでしょうが、ともかく日本人は自然を征服すべき敵としてではなく、慎みをもって接すべき神々の恵みあふれる聖なる空間として見たのです。最近，日本の文化を歴史的に考察して、そのさまざまな側面を「森の文化」、「海の文化」、「農耕文化」などと呼ぶ学者が増えましたが、これらはすべて日本人の神への信仰が根本にあることに注目したものです。
環境保護問題への対応は、ときには狭い専門分野の問題として分けられる傾向があります。神道の多神教的な性格は包括的であり、すなわち相対論的価値観を備え、世界の人々の様々な洞察や能力を調和させる可能性を示していると言えるでしょう。私は神道がそのような役割を演じることを期待しています。そして、今こそこのような個々の宗教の狭い利害を超えた共通の目的意識に目覚める時であると考えます。私たちの地球を守り、子供たちによりよい環境を残すためにこのような運動の促進が急務であり、それに力を注ぎたいと思っています。
私たちは世界中に富める者と貧しい者との格差、そして持てる者と持たざる者の格差がますます広がっている現状を深く憂えています。そればかりではなく、さまざまな宗教組織の絶えざる不和が原因となって、宗教の眞の価値が危機にさらされていることにも憂慮しています。国際連合が２００９年を「国際和解年＝International Year of Reconciliation」と提唱したことにちなみ、私たち神道国際学会は、真の和解を実現するためには、世界中の民草が胸襟を開いて対話しあうことが必要であると考え、その方策をみなさまとともに考えたいとおもいます。
次に、新しい時代に対して東アジアの仙と道の教えにつながるみなさまに提案したいのは、持続可能な地球にするには、私たちの行動原理を Shallow Ecology（浅い生態学）から Deep Ecology（深い生態学）に転換することです。Shallow Ecology とは、人間の利便性に役立つように自然を克服し、自然環境を改変することです。 この概念は自然を一神教の見地からとらえているものです。それに対して、Deep Ecology は人間を自然の一部として扱い、自然は人間の仲間であり、血肉を分けた兄弟姉妹である

と考えます。これは、まさに、東アジアの仙や道につながる思想や哲学にほかなりません。つまり土着の民俗宗教（信仰）の考え方です。
神道は、日本における真正の民族宗教であり、日本人のみに受け入れられるのだと考えられがちですが、一方では世界的レベルにおいて容易に受け入れられる普遍的な要素もじゅうぶんにあります。また世界のどの宗教についてもいえることですが、新しい千年紀に入った今、私たち皆が普遍的な立場に立って、直面する重大な課題にこれまで以上に目をむけるべきでありましょう。今も続く宗教間の紛争または戦争、変動する生態系への危惧、科学技術と人間の関係、政治もしくは共同体の取るべき役割や形態など多くの課題があります。これらの問題を解決していくことこそが今日の宗教思想への大いなるチャレンジではないでしょうか。
昨今、世界の宗教運動を見るとき、はっきり異なる二つの現象を認めることができます。一方には多くの宗教間または宗派間の争いや紛争を見ることができます。しかし他方には、それぞれ異なった宗教によって理解と協力と相互の啓発によって新しい道をまじめに切り開こうとする人々の動きも活発になっています。そしてこれらの人々の数が増えているということは私たちに勇気を与えてくれるものです。神道の内包する「和の精神」が大いに役立つことでしょう。